
コールドケース

一真央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コールドケース

【Nコード】

N5110C

【作者名】

一真央

【あらすじ】

199X年、NY…。物語は、黒の組織による1人の東洋人男性の射殺事件から始まった。その遺体の側に、12歳の少女が震えながら座っていた。そして時は流れ、少女は17歳の高校生として、LAに住んでいた。彼女の名前は「工藤亜希葉^{アキハ}」。日本で有名な高校生探偵、工藤新一の実の双子の姉である彼女は、LAでは少し名の知れた、コールドケース即ち未解決事件だけを解決する探偵に成長していた…。そして黒の組織に接触する際、NYで“赤井秀一”と名乗るFBIの男と出逢い、共に組織を追いつめることを提案し

た
…。

FILE 0：序章（前書き）

この小説は、「名探偵コナン」に登場するFBI捜査官“赤井秀一”と、作者（一真央）のオリジナルキャラクター“工藤亜希葉”（アキハ）（工藤新一の双子の姉）を中心として繰り広げられる小説です。

オリジナル要素が強めなので、苦手な方はご遠慮ください。

FILE 0：序章

199X年、NY……

「いやああああ！！！！ 先生！！！！」

1人の少女の叫び声が、夜のセントラルパークに響いた。

「アニキ、コイツも殺しておきましょうか」

黒のコートを身にまとったサングラスの男が、自分の後ろで不敵な笑みを浮かべる金髪の男に問いかける。

その時だった。

遠くの方から、パトカーのサイレン音が近づいてきた。

「チッ…サツか…行くぞ」

「え、あ、はい…」

二人は側に止めていたポルシェに乗り込んだ。

少女と、たった今殺した男性を残して…

『巡回中に銃声が聞こえましたが大丈夫ですか！？』

勢いよくパトカーから飛び出してきた警官は、血相変えて少女に駆け寄った。

「あ…っ…」

うまく声にならない声で、少女は泣き震えながら、自分の隣に倒れている男性を指さした。

『うわ…！』

警官は、あまりにも無惨なその光景に驚き、小さな悲鳴を上げた。しかし冷や汗をかきながらも、なんとかパトカーに戻り、

『こちら、セントラルパーク付近を巡回中の、ユアン・スミスです…！！』

セントラルパークにて、男性が1名、銃弾により死亡しているのが確認されました！

至急、応援よろしくお願いします！』

ユアンというその警官は、パトカーのヘッドライトを少女と死体に向けた。

『うつ…』

そこには先程は暗くてわからなかったが、血の海の中で震えている少女。

しかしその瞳には、もう涙は見えなかった。

「先…生…」

日本語でそう呟いたのを最後に、少女は記憶を手放して、血の海の中に倒れた。

FILE 1：最後の決意

『では、君の名前を確認するよ?』

NY市警のとある一室で、ベテラン刑事のジャックが、まるで自分の孫を見つめるように、優しく少女を見つめた。

調書を取るのは、あの夜少女を発見した警官のユアンだった。

普通なら市警の刑事が担当するのだが、少女は日本語が話せるユアンにしか慣れていなかったのだ。

『^{アキハ}亜希葉…工藤…』

消え入るような声の少女を、NYへ駆けつけた彼女の両親は、マジックミラー越しに見つめていた。

本当なら、出来ることなら、今すぐにも娘を抱きしめてやりたい。彼女を見つめるのは、工藤優作・有希子だった。

あれからすでに1週間が経っていた。
事件は国内外、世界中で話題になった。

“若き天才作曲家、射殺される”

どの新聞の一面も、この事件を扱っている。

殺害されたのは、東洋人男性、工藤和哉。

彼は世界的に有名なクラシック界の若きホープ、と賞されていた。
有名な推理小説家である工藤優作の年の離れた実の弟であり、亜希^{アキ}葉^ハの叔父である。

10代で海外のピアノコンクールの賞を総なめにし、20歳を過ぎ
てからは、オーケストラのための交響曲やオペラなど、クラシック
音楽を中心とした作曲活動を展開し、一部では“現代のベートーベ
ン”とも呼ばれている。

そんな彼の唯一の弟子が、姪に当たる亜希葉だった。

和哉の方針でコンクールや演奏会に出たことはなかったものの、幼
い頃から才能を開花させていた亜希葉は、10歳の時に和哉に付い
てNYへ渡った。

いつも一緒だった、どんなときも一緒だった、師匠の死。

彼の死の唯一の手がかりは、今、自分の目の前に座っている、この
少女だけ。

ジャックは調査書を読みながら、もう一度亜希葉を見つめた。

世間やマスコミには、この少女の存在は伏せてある。

この少女が危険にさらされることを恐れて、だ。

工藤和哉は、プロの殺し屋に殺害された。

それが捜査本部の全員一致の見解だった。

一発の弾丸で、心臓の真ん中を打ち抜かれていた。
即死だ。

ユアンが駆けつけていなかったら、この少女もどうなっていたかわからない…

そう思うと、背筋が凍る。

しかし世間では、あの有名なミュージシャン、ジョン・レノンのように、熱狂的なファンに殺されたのではないかと噂が流れていた。

『私…あの人たちのこと…全然知らない…』

『あの人たち…ということは、犯人は複数いたのかな？』

『真っ黒なコートの男が、2人…』

『そうか…。他には何か覚えているかい？』

『いいえ…』

口をつぐんだ亜希葉に、これ以上話を聞くのは酷だと思ったジャックは、ユアンに目配せして、

『ありがとう。じゃあ今日は終わりにするよ』

と亜希葉に告げると、「こっちだよ」と日本語で優しく言ったユアンについて、部屋をあとにした。

「よくがんばったね。あそこに、君のお父さんとお母さんがいるよ」

ユアンはにっこり微笑んで、優作たちに視線を送る。

「おと、う、さん…、お母さん…、…っ…」

「亜希葉…！！！」

亜希葉は力なく、足を両親の方へ向けた。

すると優作たちの方が駆け出して、亜希葉をしっかりと抱きしめた。その様子を、離れて見守るユアン。

虚ろな目の少女、亜希葉。

その瞳は、焦点があっておらず、果たして何を見つめていたのか。

ジャックはため息をつきながら、あまり書かれることのなかった調書を閉じた。

『黒いコート、か…。この事件は、内密にFBIに委託するべきだな…』

和哉の遺体は、NY市内の墓地に埋葬された。

「^{アキハ}亜希葉…、和哉さんに挨拶、しなくていいのかよ…」

亜希葉の双子の弟、新一は、何も言わない亜希葉に呟くように言った。

そつと棺に近づいた亜希葉は、眠るように綺麗な和哉の、頬をそつと撫でた。

……………また、亜希葉って呼んでよ……………

唇をキュッと噛みしめて、泣くのを我慢する。
しかしそれでも、瞳はみるみるうちに涙で濡れてきて。

あの、最期の日を思い出す。

和哉が最期に、亜希葉に告げた、たった1つの言葉。

.....愛してる.....

もう、後ろは見れない。

亜希葉は誓った。

もう二度と、泣かないことを。

FILE 2：4年後、LA

「え、父さんと母さん、ロスに来るの?!」

ここはカリフォルニア州ロサンゼルス、通称LA。

16歳となりジュニアハイスクール（中学）を卒業したばかりの亜希葉は、久しぶりにかかってきた新一からの電話の内容に驚いていた。

「ああ、もう荷造り終わらせて、今日の昼間に宅配業者が持ってたみてーだぞ」

ため息混じりの新一に、亜希葉も同じようにため息を交えて問いかける。

「でもなんで、新一が電話するの？ 父さんたち、自分で電話してこればいいじゃない」

「二人とも、電話する気なんてはなっからねえんだよ。『亜希ちゃん、驚かせた〜い!』なんて言ってたぞ」

「…全くあの人たちは…。一体何考えてるんだろ…」

その時、窓の外から車のクラクションが聞こえてきた。

「あつ、ゴメン新一！ 私もう行かないと!!」

あんたも早く寝なさいよー！ そっちはもう夜中でしょ?」

「ああ、じゃあまたな」

「ありがとう！ Good night 新一！」

亜希葉はふっと自室の時計を見た。

「げっ…もうこんな時間…！ ジョシュが怒るのも無理ないな…」

勢いよくベッドの上のバッグをつかみ、ドアを開けると、亜希葉は走ってリビングに向かった。

「ジャックさん、ハンナさん、おはようございます！」

「おはよう亜希葉、よく眠れた？」

「はい、もうばっちり！」

よかったわね、とにこやかに言うのは、ジャックの妻であるハンナだ。

ジャックもハンナも、キッチンで朝食を取っている真っ最中だった。

「亜希葉、ジョシュが外で待ってるよ。ほら、朝食のサンドウィッチだ」

ジャックは茶色の紙袋を亜希葉に渡した。

『うわあ、ありがとう！　じゃあ行ってきますす！』

『気をつけて！』

『はい！』

亜希葉は再び全速力で、広い芝生の庭やプールを横切り、車庫へ向かった。

『ふう……』

慌ただしく亜希葉が去っていった後、ジャックはコーヒーをすすりながら新聞を読み始めた。

ジャックは、4年前N.Y市警に勤務していた、あの事件の担当刑事だ。

事件後、亜希葉は家族と共に日本へ帰るはずだったのだが、それにFBIがストップをかけたのだ。

亜希葉の身の安全を考えて、亜希葉は常に警察やFBIの目の届くところで過ごすことになった。

それで、ジャックが亜希葉を引き受けることになり、極一部を除いて周りには“ホームステイ”と告げている。

また、この夏に移動となったため、ジャックは家族でLAに引っ越してきたのだ。

『あなた…、亜希葉は大丈夫でしょうか…？』

心配そうに言うハンナに、ジャックは小さく笑いながら、

『大丈夫さ、ジョシュもいることだし。』

それにあの子は賢い子だから、ある程度は自分の身を守ることができるし、バカな真似はしないだろう…』

『そうだいいんですが…ねえ？』

最近ジョシュと二人で、何かこそそしてるみたいですよ』

ジャックは笑いながらそう言ったが、ハンナの顔から不安の色は消えない。

『大丈夫さ。別に二人が付き合ってる！なんてことはまず、ありえないしな！』

『そうですよ、ねえ…？』

『亜希葉遅い！ お前が行くって言ったんだろ！』

『ごめんねホント…！ 日本の弟から電話かかってきてさ』

ジョシュはすでにサングラスをかけて待っていて、怒りながらも助手席のドアを空け亜希葉に早く乗るように急かした。

『で、まずどこに行くんだよ?』

『えっと…じゃあやつぱり、FBIのロス支部に! …ってうわあ!』

亜希葉が言い終わるか終わらないかのうちに、ジョシユはいきなりアクセルを踏んだ。

ジョシユ・スタンスはジャックたちの孫で、亜希葉と同年の16歳(ちなみにアメリカでは16歳から免許が取れる)。

この愛車のパジェロは彼と離れて暮らす両親からの、ささやかなプレゼントだ。

ジョシユの父親は、アメリカ合衆国大統領のシークレットサービスとして働いている。

シークレットサービスとは、首相や皇族、王族などの重要人物を、命をかけて守る部署である。

そんなたくましい父親の背中を見てきたジョシユは、(見た目とは裏腹に)自身も様々な武術を身につけたり、周りの何倍も勉強に励んだりしている。

見た目がとてもワイルドで、地毛のブロンドにオーシャンブルーのその瞳は、カリフォルニアの大地によくなじんでいる。

だから周りの女子たちには、決して放っておかれることのない存在で、人気もあるのだが…。

『もう! もつと安全運転心がけてよね! 免許取ったばかりなんだから』

隣で怒る亜希葉に、『はいはい』と二つ返事で欠伸をしながら返す

ジョシュ。

ジョシュは必要なときに適当に女の子と遊べばいい、と思っていてあまり恋愛などに興味がない。

だからあまり、女性に対して優しくないのだ（しかし泣かせるようなことをしないところが、無愛想でもモテる理由になっている）。

『で、FBIに何しに行くんだよ』

『決まってるでしょ！　まずは先日お会いした、ジョーディさんのところを尋ねて…』

『“コールドケース（未解決事件）の資料を見に行く” だろ？』

『わかってるなら聞かないでよ…』

ため息をつきながらハイウェイ（高速道路）の様子を窓からのぞく亜希葉を、ジョシュは横目で見つめた。

『…黙っていれば美人なのに…』

そうばそつと独り言を言ったジョシュに、『なんか言った？』とこちらを向く亜希葉。

『なんでもない』

と返事して、ジョシュはさらに車を飛ばした。

FILE 2：4年後、LA（後書き）

すみません…！オリキャラ多すぎですね；

しかもまだ、主人公の容姿など、全然書けてないです…！
今のところ、オリキャラは

工藤亜希葉（主人公・16歳）

工藤和哉（享年25歳）

ジャック・スタンス（56歳）

ハンナ・スタンス（54歳）

ジョシュ・スタンス（16歳）

…となっております。増えます…！多分…！

ちなみに（ ）の年齢は、LAに越してからのもです。

FILE 3：最初の事件（事件編）

『ハイ亜希葉！ ジョシュも！ よく来たわね！』

出迎えてくれたのはやはりジョディだった。

『ジョディ、久しぶり！』

ビルの前で待ち合わせしていた亜希葉とジョディは軽くハグすると、早速中へ入っていった。

『まだこっちに来て日は浅いでしょ？ でもその様子だと、カリフォルニアの氣候があなた達によく合ってるみたいね』

『そうなの。NYよりも過ごしやすいかも…』

『それはよかったわ。で、小さな探偵さんたち、今日は何が知りたいのかしら？』

ジョディは笑いながらカフェに二人を通して、テーブルに着かせながらそう尋ねた。

『小さな、は余計だ』

『あら、ごめんなさい。二人が可愛いものだから』

フツと笑うジョディに、ジョシュはしかめ面をした。

『ジョディ、私たち、コールドケースの資料が見たいの』

『…やっぱり…』

ジョディは軽いため息をつきながら、話を続ける。

『あなた達の活躍は、NYの友人から聞いているわ。

だけどね、まず亜希葉、あなたはFBIの監視下で、身を守られていることを忘れてはいないはずよね。

ジョシュも、もしあなたに何かあったら、あなたのお父様が困られるの。

私たちはあなた達に、危険なことをさせるわけにはいかないわ』

しゅんとする亜希葉と、平然と黙ったままにいるジョシュ。

二人の様子を見て、ジョディは再び口を開く。

『でもまあ…あなた達にストップをかけたところで、それに従うような聞き分けのいい子じゃないことも知っているわ。

聞かせてくれない？

何故亜希葉、あなたがコールドケースにこだわるのか…』

亜希葉とジョシュは顔を見合わせた。

ジョシュはまっすぐ亜希葉の瞳を見据え、深くうなずいた。

そして亜希葉はジョディに向き直り、おもむろに口を開いた。

『最初にコールドケースに手を出したのは、1年前…。ホントに最初は、偶然だったんです』

1年前、NY……

亜希葉とジョシュはまだジュニアハイの生徒で、周りより勉強やスポーツが優れていてルックスもよく、いつも二人で行動していたこともあり、学内では多少名の知れた存在だった。

亜希葉は東洋人にもかかわらず、母譲りのルックスが周囲の人を引きつけた。

肩より少し下のセミロングで、真っ黒なストレートのよく風になびく髪、東洋人にしては高い鼻、二重の大きな目。

異国情緒ただようその容姿は、男女問わず誰でも魅了する。

他人に親切で弱いものいじめを許さない亜希葉は、幼い頃日本で和哉に言われて習っていた剣道や空手の技術を駆使して、いつも学内でのトラブルをジョシュと共に解決していた。

そんな彼らは夏休みに入ったばかりの7月の夕暮れ、学校の図書館である1人の少年を見かけた。

その少年は図書館の隅のテーブルに、何かを見つめながら独りぼっちで座っていた。

あまり気にもとめなかった亜希葉だが、ジョシュの呟いた『アイツ、泣いてるな』の一言で、少年に駆け寄った。

『Hi! どうしたの? 大丈夫?』

急に声をかけられ、しかもかけてきたのが亜希葉とジョシュだったこともあり、その少年はひどく驚いた顔をした。

『あ…あの…』

どぎまぎするその少年に、亜希葉はそつとハンカチを差し出した。

『なんで泣いてるの？ よかったら教えて？』

につこり笑う亜希葉と、その後ろで自分を見下ろしてくるジョシュに、少年は口を開いた。

『僕、6年のマイク・タイラーです…。あの…』

『言いにくいことだったと言わなくていいぞ。亜希葉、お前ももっと他人の気持ち考えろ』

『なによ！ この子が泣いてるって最初に言ったのジョシュじゃない！』

今にも言い争いが始まる、という前に、マイクは『あの！ 話：聞いてもらえますか…？』と不安げに口を挟んだ。

『もちろん』

亜希葉とジョシュはマイクの向かいのいすに腰掛けた。

マイクは手に握っていた1枚の古ぼけた写真を二人の前に差し出した。

そこには美しい女性に抱かれた赤ちゃんと、その女性の肩を抱く優しいそうな男性の3人が写されていた。

『それ…12年前の僕の家族写真です』

『へえ…美人な母親だな』

『ジョシュってこういうブロード美人が好きなのね…』

亜希葉の頭を軽くたたくと、ジョシュはマイクに話を続けるように促した。

『僕の母さん…僕が2歳の時、10年前に、殺されたんです…』
『えっ…?!』

再び涙があふれてきたマイクに、亜希葉は『話…続けて…?』と言った。

『はい…。今日が母さんの命日なんですけど…』。

母さんはあの日、日にちが変わった真夜中に、1人で崖沿いの道を車で運転していたらしいんです。

それで、急カーブにさしかかったとき、暗くてカーブがわからなかったらしくて…ブレーキを踏まなかったらしくて…』

『その話だけ聞くと、思いっきり事故じゃねえか』

『僕もそう思ってたんですけど…最近になって、事故の前にブレーキフルード（ブレーキオイルのこと）が抜かれていたことがわかったんです』

『…!!』

声を押し殺して泣くマイク。

ジヨシユはマイクを見つめた後、隣に座る亜希葉に目をやった。すると亜希葉の肩が小刻みに震えていることに気づいた。

『おい、亜希葉…』

……………泣いているのかよ……………

ジヨシユは亜希葉にかける言葉が見つからなかった。

『…マイク…どうして再捜査されたの？』

ジヨシユはハツとしてもう一度亜希葉を見つめた。

ジヨシユの考えとは違って、亜希葉は泣いてなんかいなかった。

ああそうか、さっきのもしかして、武者震いってヤツ…？

『僕のおじいさん…母さんのお父さんにあたる人が…どうもおかしいって言って、弁護士や有力な探偵とか通して、警察に掛け合ったんです』

『それで…？ 容疑者は？ 事件当時に事情聴取された人は？』

『はい、僕の父さんと、母さんの働いていた会社の友達です…』
『そう…』

亜希葉は急に立ち上がって鞆から携帯電話を取りだし、図書館の外へ走った。

『あ、あの…亜希葉さん、どうしたんでしょう…？』

マイクはまたも不安げな声で、平然としているジヨシユに尋ねた。

『まあ…大丈夫だろ。ちょっとここで待ってるよ…』

『はい…』

ジヨシユはマイクを残して、亜希葉の後を追った。

『それで、その続きは？ まさかそこで終わりなわけないでしょう？』

ジヨディは興味津々で身を乗り出して亜希葉に問う。

『ジヨシュ…続きはアンタ話してよ』

『何で俺が…』

『いいじゃない、私ばかりだと疲れるもん』

ジヨシュは大きくため息をはいた。

俺ってコイツに完全に振り回されてるよなあ……

FILE 3：最初の事件（事件編）（後書き）

またもやスミマセン…！

殺人のトリックとか、構想してるものがあまりにも曖昧なので、解
決編は次にします；

FILE 4：最初の事件（捜査編）

『もしもしユアン？』

『亜希葉！ 電話なんて久しぶりだなあ！』

亜希葉が電話をかけた相手は、3年前から亜希葉が慕っている警官のユアンだった。

しかし今、彼は昇進してロス市警配属の刑事になっていた。

気さくで常に人に優しい彼のことを、亜希葉は兄のように慕っていた。

『どうしたんだ？ 何か聞きたいこともあるのかなお嬢さん』

『…そうなの…実は…』

亜希葉は開きかけた口を閉じた。

自分は一体、何をしているのだろう。

でも亜希葉の中では、マイクのことを放っておけないという気持ちが強かった。

亜希葉は深呼吸をしてから、再び口を開いた。

『ユアン…ちょっと教えてほしいことがあるんだけど…』

亜希葉とジョシュ、それにマイクの3人は、今N.Y市警の近くにあるカフェテリアで、ある人が来るのを待っている。

『亜希葉！』

『ユアン！ 仕事中にゴメンね…』

カフェのドアが開いて、駆け込んできたのはユアンだった。

角の方に座っていた亜希葉は手を振ってユアンに席を教える。

ユアンは息を切らしながら空いているマイクの隣に腰を下ろし、マイクとジョシュにも挨拶した。

『いいさ、もう終わったところだし。…ところで昔の捜査資料なんて、何に使うんだ？』

『ちょっとね』

亜希葉は早速捜査資料を読み始めた…。

『ところで、この子は？』

ぶつぶつ呟いている亜希葉をよそに、ユアンはジョシュにそう尋ねた。

『マイク・タイラー。その事件の被害者の息子』

『はああ！？ お前たち、一体何してるんだよ！』

『俺も知らねえよ…。亜希葉に聞いてくれ…』

ジョシユは頼杖をつきながら、嫌に真剣な表情の亜希葉を見つめる。

『…これ何？ “ガソリンスタンドの店員の証言” って』

『何が書いてあるんだよ』

ジョシユは突然ぶつぶつ声が大きくなった亜希葉の読んでいるペー
ジをのぞき込んだ。

亜希葉は次のように読み上げた……

『午後11時30分に被害者は、帰宅途中にあるセルフのガソリン
スタンドへ寄ったことが、持ち物の中にあつたレシートでわかった。
写真をその夜被害者を手伝ったという店員に見せると、確かに被
害者だと証言した。』

しかしここでガソリンスタンドに寄れたということは、ブレーキ
フルードはまだ抜かれていなかったことになる…か…。

しかもその後、どこにも寄っていないみたい』

『でも自殺の可能性はゼロになったわけだ』

『どうして…』

ユアンの言葉にマイクが反応した。

『だって、これから自殺する人間が、わざわざ給油なんてしないだろ？』

亜希葉はパラパラとページをめくった。
そして再び、あるページで手を止めた。

『この写真…』

『その写真です！ 僕のおじいさんが専門家に鑑定してもらって…』
マイクは身を乗り出して、事故の衝撃で変形してしまっているエンジンなどの写る写真を指さした。

『ほら、エンジンフルードのところに、大きな穴が空いているんです…』

『ホントだ…』

ブレーキフルードにスポットを当てたわけではないで見づらい写真なのだが、確かに容器に対して25セント硬貨ぐらいの穴が空いている。

ユアンも興味津々に見ている。

『でもこんなに大きな穴なら、開けてすぐになくなるだろ、オイル…』

ジョシュは頭をかきながらもっともなことを言った。

『スタンドの店員もアヤシイ行動はなし。監視カメラでチェック済

みだって…ん？

店員の証言に追加があるみたい…。

給油後にたまたまボンネットを見たら、隙間からわずかに白い煙が出ていた…！？

開けて調べますと言ったら、彼女は「きっと暑いからヒートしただけだ」と答えてきたので、それ以上は何も言わなかった…」

亜希葉の読み上げた文章に全員が固まった。

『どうして警察はこれについて追求しなかったの！？ 店員も何やってるのよ…！』

亜希葉は声を荒げてユアンに詰め寄った。

『亜希葉！…！』

ジヨシユの一声でハッと我に返った亜希葉は、難しい顔をしているユアンに『ごめんなさい…』と呟いた。

『亜希葉、落ち着け。それに店員だってまだ17歳って書いてあるだろ…』

『うん…』

亜希葉は更にページをめくった。

そしてあるページで手が止まった。

『…そっか…わかつちやった…』

『…は？』

亜希葉の小さな声に、3人は驚いた。

『…でも、証拠がないの…。ねえ、直接対決して、カマかけてみてもいい？』

FILE 4：最初の事件（捜査編）（後書き）

私には上手く書けません…！ミステリー…！
赤井さんはあと2、3話したら登場です；

FILE 5：最初の事件（解決編）

亜希葉とジョシュ、ユアンは、マークに案内されて、今日の夜自宅で行われるという食事に向かった。

『ねえマイク、お母さんのお部屋って見せてもらえるかな？』

『はい…。昔のままにしてあるって、おばあさんが言っていました』

『ちなみにお母さんの好きなものは？』

『お花だって…。おばあさんが言っていましたけど…。』

『食事は何時から？』

『8時です』

『ふん…。』

質問攻めにあつたマイクは、わけもわからずにただ答えただけだった。

そしてマイクの自宅に着くと、亜希葉は鼻歌を歌いながら玄関へ行った。

不安そうな顔をするマイクの頭をくしゃくしゃにしながら、ジョシュは亜希葉を目を細めて見つめながら言った。

『大丈夫だろ。アイツ、突拍子もないことするけど、バカじゃない』

し考えてないわけでもない。

マイク、お前は取りあえず、俺たちが怪しまれないように笑って「友達だ」って紹介すればいい」

『はい…！』

そんな二人の会話を聞いて、ユアンは笑いながら後に続くも、やはりどこか不安が残る思いを振り切ろうとしていた。

『犯人は、あなたですね？』

そう言つて亜希葉が指さしたのは、マイクの父親だった。

『な…君は一体何を言つてるんだ！』

亜希葉は至つて冷静に話を続ける。

そして周りのジョシユ、マイク、ユアン、被害者の元同僚たちは、息を飲んでその様子を見守った。

『トリックをお話ししましょうか…』

事件当日の午後、あなたはいつものように一緒に昼食を取るために、奥様のオフィスへ足を運びました。

…しかしあなたはその前に、スーパーでガムテープと大量のドライアイスを購入してますね…？』

『昔のことだ…。そんな細かい買い物まで覚えていないよ』

肩をすくめる父親に構わず、亜希葉は話し続ける。

『まずあなたは、奥様との昼食後、職場の社員専用の地下駐車場行った。

そこで奥様の車のボンネットを開け、ブレーキフルードに穴を開けてそこにドライアイスを大量に穴に当てた…。

それをガムテープで固定し、後は放置』

『でもそれって会社の駐車場なんだろう？ 誰かに見つかるかもしれないだろ』

ジヨシユの言葉に周りはうなずいた。

『…聞くところによれば、その日のその時間は週1で行われる社員全体の定例会議。

毎日一緒に昼食を取っていたあなたなら、そんなことわかってますよね。

ドライアイスも、きつと計算していたんでしょ。まああの辺りって危険な道が多いし、アバウトな計算でOKだし。

どうせボンネットの中にもドライアイス敷き詰めたりしてたんでしょ？ 時間稼ぎにね』

『証拠は…？ 証拠がないと起訴できないだろ？』

『証拠はコ・レ』

亜希葉はその場の全員に見えるように、2枚の写真を見せた。

『こっちはブレーキフルードに付いていたなんか粘りけのありそうな布の写真。』

そしてこっちは、事件当日のあなたが立ち寄ったスーパーの防犯カメラの映像の一部。』

あなた、開業医（自宅などで病院を開いている医者）でしょ？

その日あなたは普段通りに仕事をしていたって調書に書かれていますし、しかも店の名前もバッチリよ』

につこりする亜希葉は、

『あとこれ。奥様の気持ちを考えたらどうしようか迷ったけど……やつぱり渡すべきよね』

亜希葉はバッグの中から古ぼけた一冊の本を取り出した。

『花の図鑑……？ あの子は花が好きだったのよ』

マイクの祖母は泣き崩れてしまい、祖父はそんな彼女の肩を優しく抱いた。

『これ、花の図鑑じゃないんです』

カバーを外すと、それは花の図鑑ではなく、ビロードの表紙の日記だった。

そして表紙を開くと、亜希葉はパラパラとページをめくって声に出して読み始めた。

19XX年、2月…

『事故の1年以上前ね』

今日、私、保険に入ったわ。

だってこれから彼と二人…じゃなくって、おなかの中の赤ちゃんとの生活が始まるから。

何かあったら困るし、これからは妻として、母親としてもっとしっかりするの。

12月…

私たちの赤ちゃんよ！ついに生まれたわ！

名前は彼のお父様からいただいて、マイク。

マイク、無事に生まれてきてくれてありがとう…。

私、本当に幸せなの…。

翌年3月…

『事件の年よ…』

彼、大丈夫かしら…。
最近働きづめで、なんだか心配よ。体を壊さないで欲しい。

4月…

銀行から電話があつた。

彼への融資をやめたいって。

他にも借金があるみたい。

彼、お金がない人は無料で見てあげているし、でも彼は何も悪くないわ…。

私、妻として何も出来ないのかしら…？

でも今は、マイクには申し訳ないけど働くしかないわね…。

ごめんね、マイク

5月…

彼の部屋を掃除していたら、車の構造図や何か計画書が出てきた。

これ以上は何も書かないわ。

みんな、ごめんね。

愛してる

『これで全部よ』

亜希葉は日記を父親に渡した。

『奥様、知っていらしたんですよ。あなたの計画を。知っていたけど、あなたに何も言わなかったのは…』

父親の流す涙に、周りは何も言えなかった。

『認めますね…？』

ユアンの言葉に、彼は深くうなずいた。

『亜希葉、すごいわ！その男、認めたのね』

『ああ、認めた』

ジヨシュはアイスコーヒーを口にしながら首を縦に振った。

『けど、なんで？ ハツタリって？』

『2枚の写真、あれってウソなの。』

ネバネバな布なんて見えなかったし、10年も前の監視カメラの映像なんて、すぐに手にはいるわけないもの』

至って冷静に答える亜希葉。

『日記はどうやって見つけたの？ 家族も知らないような…』

『本当に見つかるとは思わなかったんだけど…私、前にジョシュのママとテレビドラマ見てたときに、主人公が日記を別の本のカバーを掛けて隠していたっていうシーンを思い出したの』

『じゃあ最後に、どうしてトリックがわかったの？』

『…彼のその日の行動で、調書に書かれていなかった“買ったもの”が気になって。』

それだけはジョシュに調べたの。ジョシュの友達の親が、その店の店長さんでさ。

ドライアイスは事件の数日前に注文されていたらしくて、店側の名簿に彼の名前が残されていたの。

ジョシュって案外友達＆人脈多くて大助かり』

またニツコリする亜希葉、無口なジョシュ。

そんな二人を交互に何度も見て、ジョディは再びため息をついた。

『アイツの言っていたとおりだわ…。』

“二人は糸筋縄じゃいかない”ってね』

『『アイツ？』』

『ほら、今話にも出てきたじゃない』

今度はジョディがニツコリ笑った。

『『……ユアン！…！』』

『前に仕事でね。今は飲み仲間よ』

口をあんぐりさせる亜希葉に、ジヨディは続ける。

『じゃあ…私も二人に少しだけなら協力するわ。

でも、教えて？ 何故コールドケースなの？

今起きている事件の方が、調べやすいし犯人が捕まる確率も高いじゃない』

『それは…いつか言うわ』

『…必ずね』

愛のカタチはいろいろ。

FILE 5：最初の事件（解決編）（後書き）

書くの遅くなってすみません…！

なんだかグダグダだし；

あまりトリックとか深く考えないでくださいね；

トリックの苦情なども受け付けません…！

推理モノの小説ではなく、あくまで娯楽モノ（？）にしたいので；

早く赤井さん出したい…！次回は！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5110c/>

コールドケース

2010年10月15日20時07分発行